いるかを考えることは、不可欠な作業となる。

鷲田清一（大阪大学名誉教授）は、自分の「身体」は「像（イメージ）」でしかありえないと主張してきたが、21 世紀にふさわしいファッション論を築き上げていくためには、鷲田とは違う角度で衣服やファッションを捉えいく必要がある、と本書では強調している。ファッションは、何が美しい身体かを決定する社会的なシステムであり、「かっこいい」や「かわいい」の規範、「男らしさ」や「女らしさ」の通念、「洗練」と「野蛮」の境界線などを決める場でもある。これらの美意識こそ、束縛の最たるものである。これらの美意識に基づいて、ファッションは美醜による差別の体系を作り上げる。美しい人を称賛することは、そうでない人を否定する差別的な行為となる。それを日々、すべての人が普通にやっている。

本書は、方法論的にはこの「認識的」な面で、ユニーク性を持っている。本来、「哲学」は、認識の仕方にこだわる傾向が強い。そういった意味で、本書が「ファッション」をどう認識しているのか、という点について、学ぶところが多い。ファッションは、服の作り方や売り方のスキルについて論じられることが多いが、なぜ人は服を着るのか、なぜファッションにあこがれを抱くのか、という点について「哲学」的に議論する機会は少ないが、少なくとも、欧米では常識として、一般の市民が哲学的思考を身につけている場合が多いので、本書の認識論を参考にして、日本でも普段の生活やビジネスで「ファッションの哲学」を語る人が増えると、本書の紹介も意味を持つようになる。ぜひ、本書を愛読していただきたいと念ずる次第である。

E-mail：drm@muc.biglobe.ne.jp

黒木亮著
『アパレル興亡』

岩波書店、2020 年刊
496 頁、2090 円＋税

国際ファッション専門職大学
山本雅男

日本の文学界には 2 つの領分がある。芸術性や思想性の高い「純文学」という分野と一般大衆を読者とした娯楽性の強い「大衆文学」と、この 2 つである。

それを象徴する、もっとも分かりやすいのが「芥川賞」と「直木賞」の両文学賞である。どちらも、若手作家の登竜門として位置づけられ、これにより作者の業界内における位置が定まる、とともに社会的な名声、評価の地歩も固まる。かずある文学賞のなかでも社会的な認知度は他を大きく引き離している。

いずれも、文藝春秋社を興した菊池寛が昭和 10 年（1935 年）に創設したものである。菊池の意図どおり、文学者の社会的、経済的地位向上は現在まで続くほどの、硬い地盤を築いたといえよう。しかも、この 2 つを分けたのは、彼のさまざまなアイディアのなかでとりわけ特筆すべきところといわれている。特筆といえば、じつはこれ、特殊日本的な現象で、いささか奇妙といわざるを得ないものでもある。

だいいち、昭和 10 年創設ということは、それ以前にはそうした区分は存在しなかった。夏目漱石も、森鴎外も、自分たちの作品がどちらに入るかなど意識することはなかった。つまり、「純文学」「大衆文学」などという概念そのものがなかったということだ。

奇妙さの理由、2 つ目。そもそもが、まことにもって定義、境界線があいまいということにほかならない。とりわけ、昭和 30 年代に入って、「中間小説」といわれる作家、作品が出現するに至って、境界の不鮮明さは極まってしまった。ところが、それがわかって

いながら、供給側（作家）も需要側（読者）も、またそれを仲介する出版業界も、この違いを前提に動いている。

さらに奇妙さを増しているのが、諸外国との比較。欧米各国では、一般書は fiction と general の 2 種類に分けられるのみ。前者はいうまでもなく創作作品で、後者は、日本ではノンフィクションといっているジャンル。創造と実証なのだから、まことに単純明快。

ようするに、日本では、文学に芸術性を過剰に求めるきらいがあるということになろう。

さはさりながら、「純文学」分野は一括りになる一方、「大衆文学」の側には多様、多彩な下位区分が用意されている。たとえば、「時代小説」「歴史小説」「推理小説」「探偵小説」「SF 小説」「経済小説」「スポーツ小説」等々、夥しい分野が内包要素になっている。

「歴史小説」を例に、少し立ち入って説明してみよう。歴史学者あるいは歴史研究者は第 1 次史料に基づいて、論説を展開するが、歴史小説は、ときには 1 次史料を参考にすることはあっても、もっぱら第 2 次史料や研究者による学術成果をもとに作品を創作することが多い。むしろ、研究者が実証的であるがゆえに言及を慎む部分に想像を加え、史料間をつなぐのが歴史小説の存在意義となっている。また、そのディスクールの巧みさこそが読者を引きつける創作の魅力となっている。小説は事実より奇なり、なのである。

つまり、学術研究と文芸創作との違いが厳に存在する所以である。この一事からも、文芸創作の自由度がいかに高いかわかるし、それゆえはるかに多くの読者を獲得しているかも理解できよう。

さて、ここで取り上げる黒木亮『アパレル興亡』は、ジャンルとしては「経済小説」、さらにいえば「企業小説」の区分に入る。作者自身が銀行、証券、商社に勤務していた経歴をもち、これまでに実業界を舞台にした多数の作品を書いてきている。そうした経験がこの作品でもいかんなく発揮されているのはいうまでもない。

創作作品であるから、主人公やそれを取り巻く人びと、主舞台、生起する事共はいずれも創造上の作り事ではあるが、それ以外はほぼすべて実在の人物、場所、企業、事件である。日本の現代史をたどるクロニクルの性格も併せ持っている。

たしかに、経済活動、それも「興亡」というかたちで時系列に沿ってそれらを描こうとすれば、その時々の社会、経済情勢と関連づけないわけにいかない道理である。作者の制作意図、そのひとつは、ある企業の栄枯盛衰を手掛かりに、日本社会の歴史を描出しようとしたところにあると見て間違いない。

舞台は甲州山梨出身の池田定六が昭和 24 年に創業する「オリエントレディ」という高級婦人服を扱うアパレル企業。太平洋戦争後の日本の復興、朝鮮戦争特需、高度経済成長、バブル崩壊という、実体経済のまさに「興亡」と軌を一にする企業活動を綿密に描いている。とりわけ、村上ファンドとの攻防や、おりおり描きこまれるユニクロ柳井正の動静などは、作品の実在感を高める効果、抜群である。

アパレル業界は、「川上・川中・川下」と河流水に譬えられるように、生産と物資に一連の流れがある。それとともに多くの業態が、多くの人びとが関わる流域面積の広い業界である。それは日本のお家芸ともいわれる自動車産業の裾野の広さとも似通っている。関わる企業と人間が多いということは、時代の流れを敏感に捉え、それを怠ると凋落の掣肘をまともに受ける。三陽商会やレナウンなどへの言及はそれを示している。

物語は「オリエントレディ」1 社の経営者、商品開発の中核、マーチャンダイザーを中心に、その青年期から壮年期、老年期までを丹念に追っている。多少、ミステリー的な謎解きの要素もあるので、詳述は避けるが、ファッションのみならず、日本の戦後史、経済史に

興味のある人は、ぜひ読まれることを勧める。なかでも、ファッション業界を志そうという学生には、どの分野に関わりなく、業界の錯綜する構造の一端を知るには好適である。四六判 500 頁になろうという、いささか大冊という難点はあるが、益するところ多大なものがある。

もちろん、業界に直接、間接に関わりのある方々にも時間の無駄にはならない。おそらく業界を詳らかにする場合でも、歴史や社会との関連、業界全体を小説という形式で俯瞰する目に触れることは、そう多くないと思われるからである。繊維産業史といった学術的な書物とは異なる、読者を飽きさせ倦ませることのない「大衆文学」の精神が現われている。

内容もさることながら、文体も「大衆文学」ならではの読みやすさがある。というのも、「純文学」作品にみられる、人間の喜怒哀楽、愛憎心情がほとんど描かれておらず、遅滞なく読み進められるからである。また、判読で立ち止まり、考え込まされるという教訓めいたくだりもない。それだけに、文学への愛好感のひとつである「身につまされる」という思い入れ、深みに欠ける憾みがあるということだ。

そして、もっとも核心的な作品の印象。いったいに、これが創作作品なのかと、読了後、訝しくなるところ。くりかえすが、主人公や主舞台、そこに働く人びと、これらは創造上の産物なのだが、それ以外はすべて実在、実名で語られるのだ。たしかに、日本経済の過去の来し方を振り返れば、オリエントレディという企業は、「どこかにありそうな」、いや「どこにでもありそうな」風景に思われてくるのである。物語のディテールが、国内外を問わず、丹念な現場取材で固められているだけに、そのリアル感には圧倒される。

日本古典には「虚実皮膜」という言葉がある。近松の演劇観を支える主要概念である。虚と実が混然一体となるところに迫真の舞台が成立すると考えたわけだ。近松の数々の心中物は実際に起きた事件に材を取っている。この『アパレル興亡』、さながら日本文芸の伝統を引き継いでいるかのようである。

最後に全体の構成（目次）を付しておく。

プロローグ
第 1 章　笛吹川
第 2 章　つぶし屋と三越
第 3 章　百貨店黄金時代
第 4 章　株式上場
第 5 章　社長交代
第 6 章　ジャパン・アズ・ナンバーワン
第 7 章　カテゴリーキラー台頭
第 8 章　ヒルズ族の来襲
第 9 章　中国市場開拓
第 10 章　兵つわものどもが夢の跡
エピローグ

＊じつは、種を明かせば、物語の細部にいたるまで、モデルのあることは、業界人なら誰でもよく知るところである。

中野香織著
『「イノベーター」で読むアパレル全史』

日本実業出版社、2020 年刊
302 頁、1800 円＋税

国際ファッション専門職大学
平野　大

本書の著者、中野香織は、大学院でイギリス文化を研究し、現在では、そのバックボーンを活かしながら「服飾史家」として精力的に、ファッションに関わる著作を発表し続けている。その彼女が「これから『ファッション』や『アパレル』の世界を学びたい人のために書かれた入門書」（本書、1 ページ）という

E-mail：hirano.dai@piif.ac.jp